

小学校国語科における地域教材活用の一方法 — 泉鏡花「化鳥」を中心に —

One method of applying regional teaching material in elementary school Japanese classes — focusing on Avian by Izumi Kyoka —

馬場 治 (人間科学部こども学科教授)

Hajimu BABA (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

ふるさと金沢を舞台とした児童向け文学作品により郷土愛を育む地域教材を選定し活用する一方法を模索する。金沢情緒が集約されている旧市街に位置する金沢市立馬場小学校において同校(当時は養成小学校)を卒業した文豪・泉鏡花の名作「化鳥」(明治30年4月「新著月刊」初出。小学校3年生と同じ年頃の廉少年が主人公。卯辰山や浅野川周辺が舞台)の幻想的な世界(番小屋に住み橋銭で生計を立てている母を慕う廉少年は、「心の眼鏡」で「中の橋」を渡る人々を観察し、各々動物に喩える)を地域の身近な教材とするため、口語体小説だがルビが振られていても難しい明治の文章を3年生にも理解しやすいよう咀嚼し、中川学作『絵本化鳥』(泉鏡花記念館企画編集、国書刊行会発行、平成24年11月)を活用した学習指導案を作成し、総合的な学習の時間に4回にわたり実施させていただいた。その際、児童全員の共同注視を促すため添付写真のように電子黒板を使用した。

〈キーワード〉

文学都市 ふるさと教育 絵本 視覚化 想像力

一 「地域教材」と「ふるさと教育」について

加賀百万石の城下町古都金沢は、旧制第四高等学校以来の学都であり、近代日本文学史に名を刻む文豪や作家を輩出した文学都市でもある。故に、金沢を舞台とした作品も多いが、たとえ地元の子供であっても地域教材として学ぶ機会がなければ、興味を持って自ら調べて訪れる外来の観光客よりも知らないまま通り過ぎてしまう。

福井県丸岡出身で青春時代を旧制四高で過ごした中野重治は小説「歌の分かれ」の中で金沢の眺望景観について学生主人公の印象論として「金沢という町は片口安吉にとつて一種不可思議な町だった。犀川と浅野川という二つの川がほとんど平流に流れていて、ふたつの川の両方の外側にそれぞれ丘があり、ふたつの川のあいだ

にもう一つの丘があり、街全体は、ふたつの川と三つの丘とにまたがってぼんやりと眠っている体であった。そうして、街の東西南北にたくさんのお寺がかたまつていて、町の名にも寺町とか古寺町とかいうのがあつた。町の中央に名高い兼六公園という公園があり、つまりこの公園は川にはさまれた丘陵に拠つていたのであつた。」と記している。これは金沢市公式ホームページ都市整備局景観政策課による「景観に関する指定区域等」その他景観関連条例(市独自条例)に基づく指定区域との関係」の「眺望景観保全区域」「景観継承区域(こまちなみ保存区域、寺社風景保全区域、斜面緑地保全区域、保全用水区域)」とほぼ重なる(平成29年12月閲覧)。自然と人工や伝統と現代が程よく調和し、地元民にも外来者にも優しく居心地のよい公共空間を形成した環境である。身近な日常生活で自然と共生し歴史と出

会え学芸に勤しむ都市が金沢と言え。学都かつ文学都市である金沢は、国語科における「地域教材活用」や「ふるさと教育（学習）」に最適な要件を備えている。

「地域教材」について桑原正夫は「地域素材と地域教材 地域は人びとの生活のための拠点であり、その生活が多面的に包括されている一定の地理的な広がりがある。／地域には固有の文化と住民の連帯感が形成されており、人びとは日々の暮らしのなかで言語生活を営み育てていく。地域には多くの学ぶ素材があり、地域で学び地域を学ぶことによって体験的である実感ある学習が期待できる。このような観点から、地域素材を、学習成立の可能性に着目して教材化したものを地域教材という。／国語科における地域教材 国語科は各教科のなかでも教科書への依存度が高く、いまだ教科書教材中心の学習を克服しえていない。主体的な学習者の育成、生きる力の啓培のためにも国語科の指導は、学習者の言語生活に着目しつつ、言語能力の育成を目指して進められていくべきである。／地域教材は、完成された言語文化財のみならず多種多様である。その地域に伝承されている民話、伝説、郷土で生まれた文芸、民芸、方言、遺蹟、神社仏閣、地域開発の諸情報など、学習者を取り巻くあらゆる生活に根を張っている。また、それらに直接かわり生きていく人材も豊かである。語り部としてのおばあさん、郷土の偉人・恩人にかかわった人、今、地域文化を担って活躍している人など、学習者がじかに接し親しんでいる人びともまた、生きた地域教材である。／これらの地域教材を活用した単元においては、学習者は地域素材に直接かわり、調べ、地域の人びとにインタビューするなど、学習は常に現実的でありアルである。学習の様相はフィールドワーク的な色彩が濃くなり体験的となる。身近で実感的な学習となる。／それだけに、単元の構成に当たっては、学習目標に照らした「教材化」と、学習過程の周到な計画が不可欠である。地域教材が多様なだけに、時に「学習の手引き」など、学習へのいいねいな誘いも必要であろう。」と述べている（日本国語教育学会編「国語教育辞典」）。

一方、「ふるさと教育」については、例えば秋田県総合教育センター公式ホームページ「学校教育共通実践課題：ふるさと教育の推進」心の教育の充実・発展を目指して―」には「ふるさと教育のねらい／ふるさと教育は、人間としてのよりよい生き方を求めて昭和61年度から取り組んできた「心の教育」の充実・発展を目指したものであり、平成5年度より学校教育共通実践課題として推進してきてい

る。／ふるさと教育は、児童生徒が郷土の自然や人間、社会、文化、産業等と触れ合う機会を充実させ、そこで得た感動体験を重視することによって、(1)ふるさと

よさの発見(2)ふるさとへの愛着心の醸成(3)ふるさとに生きる意欲の喚起を目指すものである。」と記されている〔平成29年12月閲覧〕。また、島根県教育委員会公式ホームページ「ふるさと教育推進事業基本方針」には「2 ふるさと教育の理念／ふるさと教育とは、自然・歴史・文化等の郷土学習によってふるさとに対する認識を高めるだけでなく、地域の人々とのふれあいや地域に出かけて行う自然体験、社会体験、生産体験、職場体験等を通じて、ふるさとへの愛着と誇りを養うとともに、コミュニケーション力や地域社会の一員としての自覚を身につけた心豊かな人間性・社会性を持つ子どもを育もうとするものである。また、ふるさとの今を知り、地域課題に正対することで、ふるさとの将来に自分が果たすべき役割に対する使命感を醸成しようとするものである。さらに、ふるさと教育は、地域の「ひと・もの・こと」を活用した教育活動を通じて、美しいものや気高いもの、生命の神秘などに感動する心や、他人をやさしく思いやり、卑怯を恥じる心を養うとともに、喜びや達成感を味わいながら学習意欲を高めていくものでもある。／人格形成の最も多感な時期においてのこうした教育が、知徳体の調和的発達をもとに、社会や人との関わりの中で、自分の生き方を考え、決定し、行動していく力や問題解決能力の確実な習得につながるのと認識に立ち、島根県内の全ての公立小中学校・全学年・全学級においてふるさと教育を推進する。」と謳われている〔平成29年12月閲覧〕。

金沢市教育委員会は平成27年12月「金沢ふるさと学習 指導資料」を策定した。「金沢ふるさと学習」は、児童生徒が「何を学ぶか」という内容として示した「金沢型学習プログラム」の一つである。」と位置づけられ、金沢「学びタイム」の成果や課題を検証した結果、「金沢がもつ様々な素材や人材を活用した学習については、意欲的に取り組むことができ、金沢のよさの理解や金沢のまちへの愛着につながったという成果があった。一方で、探究的な学習となるよう、教材・教具、指導方法の工夫・改善や、身につけさせたい資質・能力を明らかにすることによって、実践を深めていく必要があったという課題も見られた。」と報告されている。

その上で、「小学校編」の学習内容について「児童にとって身近で親しみやすい内容から学習を進め、金沢のまちが持っている伝統や文化、自然、歴史、食という特

徴について、人とかかわりという視点を加えながら、具体的な活動を通して学ぶことができるよう、各学年のテーマを設定した。また、小学生という発達段階から、1・2年生では「楽しむ」「親しむ」といった、児童の身近な体験活動を大切に、3～6年生では「○○を学ぶ」「○○を調べ知る」という、具体的な体験活動や調べ活動を通して、金沢のまちの特徴を知り、金沢への愛着と誇りが持てるように単元を設定した。」として、第1学年「金沢に伝わるあそび」／第2学年「金沢に伝わる民話」／第3学年「人がつながるまち金沢」／第4学年「伝統が息づくまち金沢」／第5学年「環境にやさしいまち金沢」／第6学年「未来に向かうまち金沢」というテーマを定めた。うち第4学年に「金沢の偉人に学ぶ」という単元が設定されているが、小稿での泉鏡花については当該校の第3学年で実施することになった。例年「馬場のステキを伝えよう集会」を学校行事として開催している当該校は金沢情緒溢れる古い街並みに三世代同居で暮らす児童も多く、地域との絆が殊更強い。

二 泉鏡花と「化鳥」について

金沢は浅野川（女川）と犀川（男川）の文化圏に分かれるが、泉鏡花記念館は当該校児童の通学区域に隣接した浅野川界隈旧市街の一角にあり、身近な施設である。公式ホームページには「浪漫と幻想の作家 泉鏡花／幼い頃に母を亡くした泉鏡花。その作品は亡母憧憬を基底に浪漫と幻想の世界を小説や戯曲という形で紡ぎだしてきました。明治半ばから創作活動を始め、大正、昭和にかけて、三〇〇編あまりの作品を生み出した鏡花は、やがて文豪と称えられ、また天才とも謳われるようになりました。「義血侠血」「高野聖」「婦系図」「歌行燈」「日本橋」「天守物語」などまばゆいばかりの傑作の数々は、文学の世界だけでなく、視覚芸術である舞台や映画という手法によっても発展し、現在も人々に愛され続けています。」と紹介されている（平成29年12月閲覧）。うち「義血侠血」は明治27年11月に発表され、近代文学史で金沢を舞台とした最も古い小説ではあるが、浅野川の天神橋での運命的な再会場面が有名とはいえ、文語体の上にヒロインの水芸役者・水島友（滝の白糸）と村越欣也の悲恋物語（心中に近い死）であり、児童向き作品ではない。それに対し、「化鳥」は口語体の上に主人公が少年であり、「亡母憧憬を基底にした浪

漫と幻想の世界」が描かれており、現行『小学校学習指導要領 国語編（文部科学省）教科の目標に「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。」に適切、「想像力を養う」に優れた不思議な物語である。昔、浅野川に架かる橋で、子どもたちの常識では理解できない不思議なことがあった。それを発問として追究していくと、物語を豊かに読み味わうことができよう。しかし、宛字や旧仮名遣いで綴られた明治の文章なので、小学生にとっては原文のままでは読みにくい。そこで、原文を読みやすい現代表記に改め節略化したものが中川学作『絵本 化鳥』である。いま有名な冒頭部分を『鏡花全集 第三巻』（岩波書店、昭和16年12月）原文と比べてみれば読みやすさの違いは一目瞭然である。

絵本	原文
<p>おもしろいな、おもしろいな、お天気が悪くって外へ出てあそべなくともいいや、笠をきて、蓑をきて、雨のふるなかを、びしよびしよぬれながら、橋の上をわたってゆくのはいいのしだ。</p> <p>おおかたいのししん中の王様があんな三角形の冠をきて、まちへ出てきてそして、わたしの母様の橋の上を通るのであらう。</p> <p>い、おもしろい、おもしろい。</p>	<p>愉快いな、愉快いな、お天気が悪くって、外へ出て遊ばなくとも可いいや。笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかを、びしよびしよ濡れながら、橋の上を渡って行くのは猪だ。</p> <p>昔笠を目標に冠つて激に濡れまいと思つて向風に俯向いているから顔も見えない。着て居る蓑の裾が引摺つて長いから、脚も見えないで歩行いて行く。背の高さは五尺ばかりあらうかな、猪子としては大なものよ、大方猪子中の王様が彼様三角形の冠を被て、市へ出て来て、而して、私の母様の橋の上を通るのであらう。</p> <p>トかう思つて見て居ると愉快い、愉快い、愉快い。</p>

さて、ここで「化鳥」のあらすじについて見ておきたい。

主人公は小学校低学年くらいの男の子・廉。橋袂の番小屋で橋の通行料（橋銭）を徴収する仕事をしている母様とふたり暮らし。廉の好奇心から「心の眼鏡」に映る橋を渡る人々を観察した風景と大好きな母様との日常。語り手である「私」（廉少年）の視点で語られる話は、学校の先生よりも自分の全てを受け容れてくれる母様の教えを規範とし、自由な想像力によるユーモアにも満ちている。例えば雨の中

を菅笠と蓑を着て濡れながら橋を渡る人を「いのしし」と呼んだり、洋装のでっぷりと太った紳士を「鮫鱈博士」と名づけたり、しばしば人間以外の生き物に喩える。しかし、人間を生き物に見立てて馬鹿にしている訳ではない。むしろ、母様の影響から「人が世の中でいちばん偉い」と説く先生に反論し、人間も動物も同等、いや動物の方が上くらいの価値観を持っている。そして昔、父様が所有していた卯辰山麓の四季朝晩の移ろいを背景に母と子の密な関係を軸に物語は進んでいく。

ところが、ある日、廉は土手の石垣の棒杭に麻縄で繋がれていた猿を構っているうちに足を滑らせ川に落ちてしまう。あわや溺死の危機に突然「翼の生えた美しい姉さん」が現れて救出される。これが題名「化鳥」の象徴だと思われるが、その不思議な出来事は廉の夢だったのか、天上の異界に実在する生き物なのか、母様が化身した姿だったのか、その正体を巡る想像は尽きない。また、当該校に近い場所做起り、同じ年頃の少年が主人公なので感情移入しやすい。故に、この不思議の謎解きが、普通お化け好きな児童の興味を誘うのである(次章からは単書の指導により作成された教育研究と授業案を元に考察する。)

三 授業実践と児童の反応について

三― 教材研究 (内容について)

① 作品の舞台

明治時代、浅野川に架かる「中の橋」(末尾の写真を参照。卯辰山登り口の「天神橋」という説もある。金沢市公式観光サイトを閲覧すると「泉鏡花の「化鳥」― 照葉狂言の金沢文橋」とも言われています。)と、その周辺で物語は展開していく。

② 主要な登場人物

- ・廉：主人公。彼の視点を中心として物語は進行していく。独特な価値観を持つ少年で、人を動物に喩えることを「おもしろい」と感じている。
- ・母様おつかさん：夫が亡くなり凋落し、いまは廉と番小屋に住み橋銭で生計を立てている。
- ・学校の先生：廉が通う学校の先生で、廉とは人や生き物に対する価値観が違う。
- ・爺さんの猿まわし：猿の元飼い主で、廉や母様と同じ価値観を持っている。
- ・鮫鱈博士：橋銭を払わずに橋を通ろうとした、醜い大人として描かれている。
- ・翼の生えた美しい姉さん：川に落ちた廉を救出した謎の存在 (廉の憧憬対象)。

③ 「化鳥」の世界観

「化鳥」は明治時代に泉鏡花が発表した作品で、総じて語句や表現が難しく、教材化するには現代風の分かりやすい表現に改める必要がある。鏡花の作品としては初の口語体で少年視点であり、絵本化 (視覚化) されて比較的読みやすいが、鏡花の作品らしく幻想的で怪奇性が強いいためか難解であり、絵の助けがなければ、大人でも内容を理解するのが大変である。そこで、児童を指導するための教材化に際しては、授業者が「化鳥」の世界観をしっかりと把握し、児童の理解を促すよう物語を場面ごとに整理することが重要である。また、「化鳥」の内容を理解するには三つのキーワード、(Ⅰ)「廉の心の眼鏡」、(Ⅱ)「母様」、(Ⅲ)「現実 (こちら)」と非現実 (あちら) があることに気づかせる。

(Ⅰ) 廉の心の眼鏡

物語は廉少年の視点で進行していくが、「化鳥」の世界観を理解するには廉の独特な価値観を把握することが重要である。廉は「人や獣は皆同じである」という考えで物事を捉えているが、それが理由となって第一場面では学校の先生との意見の衝突を招き、第二場面では醜い大人の典型として鮫鱈博士が登場している。一方、廉と同じような考えを持つ人物は、廉が絶対的に信頼する存在である母様とその昔語りに出てきた爺さんの猿まわしである。こういった廉の価値観からなる「心の眼鏡」が橋を渡る様々な人々を動物に喩えて「おもしろい」と感じたり、物語に幻想性や怪奇性といった特徴を与えたりしている。このことを児童に理解させるには、登場人物の関係を整理する時間を与え、廉の考えについて注目した発問を積極的に行う必要があることを意識したい。

(Ⅱ) 母様

廉が絶対的に信頼する存在として母様が登場する。基本的に廉の価値観の原点となっているのは母様であり、学校の先生や鮫鱈博士の場面でも廉の理解者として重要な役割を果たしている。また、「翼の生えた美しい姉さん」の正体については、つきりと廉に話さなかったことが廉の行動につながっている。なぜ母様がここまで重要な存在として物語に関わるのかは、作者である鏡花自身の亡き母への恋慕の情が大きく反映しているためだと思われる。児童たちは既に鏡花の人生について調べ学習をしていることから、この根底に気づくことができるよう授業を展開すること

が、「化鳥」のモチーフの理解をより深めるために必要であろう。

(Ⅲ) 現実(こちら)と非現実(あちら)

鏡花作品の特徴として、現実(こちら)と非現実(あちら)の関係がよく物語に絡んでくる。「化鳥」でも、猿を構った廉が川に落ちてしまったことをきっかけに、謎の存在として「翼の生えた美しい姉さん」が登場し、彼女の正体を確かめるために探し回ることになる。彼女の正体は結局、最後まで不明のままである。故に指導する際は授業者の考えが唯一の正解だとは決めつけず、児童の自由な考えに委ねるべきである。こういった曖昧な描き方こそ物語を幻想的にしているが、これぞ鏡花作品の醍醐味である。但し、廉にとつて「現実の母様」と「非現実の姉さん」のどちらが大切な存在であるかは物語の最後、「みたいな！はねのはえたうつくしいねえさん。だけれども、まあ、いい。母様がいらっしやるから、母様がいらっしやるから。」(絵本)を引用して確認しておかなければならない。

三―二 指導案

第三学年 総合的な学習の時間 学習指導案／日時 平成28年12月12日(火) 2限

／場所 金沢市立馬場小学校3年1組／児童数 19人／授業者 馬場ゼミ

／指導者 宮川教諭・馬場教授(当日配付した資料を振り返り、筆者が大略に加筆修正した)

1 単元名(総時数4時間)

「金沢が舞台の「化鳥」について学び、泉鏡花が描く文学の世界を感じ取る」

2 単元について

(1) 教材観

鏡花作品は格調高く幻想的な作風であることから、大人でも読むことが難しい。しかし「化鳥」は比較的読みやすく、絵本化(視覚化)されており、馬場小学校周辺が舞台であることから地域教材として採用した。但し、従来「化鳥」が児童向けに教材化された事例はないため、事前に児童にも易しい語句や表現に改めた教材を作成し、各場面のイメージを把握しやすい関連した写真や絵をパワーポイントに挿入した電子黒板を用いて提示することでクラス全員の共同注視を促す。

(2) 児童観

これまで児童は郷土の偉人である泉鏡花について学んできた。鏡花は金沢三文豪

の筆頭であり、母校出身の小説家であることから親しみを持っている。総合的な学習の時間でも郷土の文化や歴史に誇りや愛着も育んできた。故に、児童には「化鳥」を読むことにより直に鏡花文学の幻想世界を感じ取る用意がある。

(3) 指導観

本単元を通して鏡花文学の幻想世界を感じ取るにより、作者はもちろん、作品そのものや郷土について親しみを持つことができるよう指導することを意識したい。特に、現代の当該校周辺の様子と関連づけていくことで、当時を生きた地域の人々の暮らしや先人たちが築き上げてきた郷土の伝統と文化が息づき、今も生活に深く根差していることを気づかせたい。また、単に作品を読むだけでなく、馴染みの薄い語句や表現を知るために辞書引き学習を導入して調べた活動を行ったり、PISA型読解力を考慮して写真や絵などから読み取ったことを元に話し合ったり、発表を聞いたりするような国語科に関連した言語活動を中心に授業を展開していくことで、児童がより「化鳥」に親しめるように指導したい。

3 単元の目標

「化鳥」から鏡花文学の幻想世界を感じ取ることで、作者と作品を生み出した郷土のよさに気づき、郷土に暮らす自己の生き方を考えることができるようにする。

4 単元の評価規準

学習方法に関すること	自分自身に関すること	他者や社会に関すること
・「化鳥」を理解するために必要な語句や表現について、辞書や図鑑を用いて自ら積極的に調べることができる。	・気になる点や疑問に思う箇所について質問をしたり、自らの感想を述べたりすることができ。	・相手の意見を聞いて自分の考えを深めたり、ペアで調べ学習をしたりと、問題解決へ協働的に取り組むことができる。

5 本時の学習(総時中第2時)

(1) 本時のねらい：「化鳥」について興味を持たせる。

(2) 準備物：『絵本化鳥』・国語辞典・年表・パワーポイント
魚類図鑑・地図・電子黒板

※ 異界の化身の代表「鞍馬博士」が登場。その他の本時は紙幅都合により省略。

(3)展開 (左記の45分用)

配時	学習活動	指導上の支援と評価
10分 導入	<ul style="list-style-type: none"> ○前時の復習を行う。 ・登場人物(擬人法を含む)と場面を確認する。 ・クイズ形式の穴うめ問題で基礎知識や物語の展開を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板を使い児童の視線を大きい画面に集め(共同注視)、集中力を高める。 ・組の児童全員が参加できるようにグループ活動をとり入れた復習にする。 ・橋を通る時に払うお金を何というか?等
25分 展開	<ul style="list-style-type: none"> 前時の続き ○母様が話す昔と今の暮らしを比べる。 ・父様が所有していた土地や財産について具体的に知る。 ○昔の暮らしとは違う今の暮らしのよさについて。 ・廉少年の視点から読み取る。 ○老父の猿まわしと猿について。 ・川の土手にいる猿が置き去りにされた理由について考える。 ・土手を行き交う人々が猿をからかって食べ物分け与えるので餓死することはないだろう。 ○不気味な雰囲気や漂う登場人物の鯨博士について知る。 ▽鯨博士の特徴を捉える。 ・蝙蝠傘を差し、けばけばしい襟飾り洋服を着て帽子を被ったでつぷり紳士。 ・顔が長く、鼻が赤く、胸が小さく、下腹が膨れ、脚が短い。 ▽鯨博士と母様のやり取り。 ・通行人が払うべき橋銭を置かずに橋を渡ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・電子黒板を使って春の遠足で登った卯辰山の写真を見せることによって物語の舞台が身近な場所であることを感じさせる(校舎の窓から臨める卯辰山の景色とも比べてみる)。 ・標高141mで金沢城から見えて東(卯辰の方角)に位置するのが地名の由来であることを教え、宇多須山・向山・夢香山・臥竜山・春日山など多くの別名があることも知らせる。 ・文章中から川の土手にいる猿が置き去りにされた理由についてグループで話し合いをしなから考え、児童代表に意見を発表させる。 ・猿まわしとはサルに芸をさせて各地を回るめでたい大道芸の一種であることを伝える。 ・動物園などで猿を見たり、餌を与えたりした体験がないか、児童に尋ねてみる。 ・文章中から廉の印象に残る鯨博士の特徴や行動を捉える(絵本のイラストも参考)。 ・魚類図鑑でアンコウについて調べ、「体長1m前後になる。全体に褐色で頭が大きく、体を覆う皮はぶよぶよしている」等の特徴と擬人化された鯨博士のイメージが重なるか、児童に発問してみる。更に、鯨博士の特権意識が母様と対面しての発言行動に反映されていることに気づくよう促す。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○本時の内容で気になった点や感想を発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ・気になった点や感想を積極的に述べることができる。

三―三 児童の反応

まず、題名「化鳥」の読みについて発問したところ、「かちよう」「ばけどり」という回答が出た。そこで小学生用の漢字字典で「化音カケ」「鳥音チヨウ」を確認させる。その上で「化粧」や「化身」の「化」は音がケであることを教える。次に、鯨博士が差す「こうもり傘」を国語辞典で調べて「**名詞** 金属の骨に布やビニールを張った洋式の傘」は広げると蝙蝠の姿に似ているからであることに気づかせる。続く博士の「おとがい」は小学生用には収録されていない。やや古い言い方なので「下顎」であることを自ら顔の部位を触らせて確認させる。続く「うつむいて」は「うつむく**動詞** 下を向く。顔をふせる」の意だが、少し後の件に出て来る反対語「おおむいて**動詞** 上を向く」と対で動作を伴って覚えさせるのが語彙力増強に有効である。廉が構った猿の反応を示す「けんまく**【剣幕】**」は「**名詞** ひどく怒った時などの激しい顔つきや態度」の意だが、併せて「すごい剣幕で怒鳴る」等の例文を挙げるのがよい。更に、年表と地図で「いつ、どこで」を俯瞰させたい。



1枚目と4枚目のイラストは「絵本化鳥」による

四 今後の課題

「地域教材「化鳥」は国際教材にならないか」と模索していた矢先、「鏡花「化鳥」世界に発信」「米留学生 初の英訳」「金沢の記念館依頼 幻想美を表現」の記事(北陸中日新聞平成29年11月11日朝刊掲載)を見つけた。これは中川学作『絵本化鳥』の英訳版『A Bird of a Different Feather』(異なる羽の鳥)である。訳者のピーター・バーナードさんは「鏡花は、世界に誇れる独創的な幻想文学。言葉にできない不思議な空間の描写が素晴らしい」と絶賛している。「金沢ベリックアカリキュラム」を用いた小中一貫英語教育も一層推進されており、「地域教材から国際教材へ」が今後の課題である。